



羅針盤

2015年度 第20号
都立豊多摩高等学校
進路図書部

Geistesaristokrat

2016 (平成28) 年3月9日発行

1年生のキャリア講演会をしていただいた、Hさん（おやじの会）のお話。

1年前、赴任先の京都の和食レストランで、旧友に長女の豊多摩合格を報告した。嬉しくてどんな学校か熱弁していたら、隣席の女性客に「あの…」と声をかけられた。Hさんは、騒ぎすぎたと反省し「ごめんなさい」と謝った。が、彼女は「ちがうんです」と断って、「私、豊多摩の卒業生なんです。娘さんおめでとうございます。素晴らしい学校だと伝えたくて、すごく迷ったんですが、思わず声をかけてしまいました」と説明した。びっくり。そのあとは豊多摩の話に花が咲いた。部活、記念祭、高校生活の思い出、モグラはいたか…。彼女はまだ20代半ば。豊多摩から音大に進み、現在は映画会社に勤めているという。京都には、時代劇の撮影で1ヶ月。その最終日、ロケ弁続きだったので、本場の京野菜を食べようと来店したのだった。「若いのに大変ですね」と言うと「好きでやってる仕事ですから」と笑った。不思議な夜だった。

とよたまフォーエバー ——連鎖が循環し、余波が広がる——

美しいエピソードである。保護者が合格を喜び、卒業生が誇りに思い、祝福する。こんな話が伝わっていくということは、同様の会話がいろいろなところで交わされているということだろう。私たちもいつか、卒業生として、保護者として、あるいは元職員として、こんな会話に参加したいと思う。

そのためには今、何をしておけばいいだろうか。

2年生の現代文では、丸山眞男『『である』ことと『する』こと』（『日本の思想』岩波新書、1961）を読む。古い文章だが、教科書の評論としては、読解力を錬磨するうえで、今もすぐれた教材である。1年生は教科書をもったら、早速読んでほしい。2年生も読み返してほしい。繰り返し読むことでしか身につかない力がある。

その中に、自由について述べたくだりがある。

私たちの社会が自由だ自由だといって、自由であることを祝福している間に、いつの間にかその自由の実質はカラッポになっていないとも限らない。自由は置き物のようにそこにあるのではなく、現実の行使によってだけ守られる、いいかえれば日々自由になろうとすることによって、はじめて自由でありうるということなのです。
（『日本の思想』、155～6頁）

私たちにとって大切なものは、「自由」と同じように現象する。手に入れたら終わりではなく、努力を続けることだけで守られる。手をゆるめれば、カラッポになる。自由も、民主主義も、愛も、夢も、希望も。豊多摩高校のすばらしさも。

私たちがそれを保守し続けるために、最初に必要なのは、ひとりひとりが、豊多摩のすばらしさを認識しておくことである。具体的には千差万別。人によって違う。それでいい。無理に統一する必要はない。が、それでも、共通理解をもつことはできる。冒頭に紹介したエピソードは好例。自分もこんな会話がしたいと思えば、それは共通理解になろう。

他校の関係者が豊多摩高校にやってきて、すぐに気づくのは生徒の挨拶と校内の植物である。

挨拶の声は、右からも左からもかかる。職員室から教室に行くまでに、10回も20回も挨拶を交わす。放課後の校長室のドアが開いていて、前を通る学友が次々に挨拶の声をかけて行く。

花々は、隙間を見つけるようにして咲いている。世話をしているのが卒業生と聞いてさらに驚く。

園芸部OBのどんこう会。先生や生徒、保護者が植物を育てている例はよくあるが、卒業生という話はあ

まり聞かない。しかも、月に2回ずつ、定期的に通って来ている。学校からの依頼で始まり、同窓会から補助金も出ているという。

が、頼まれ意識では長く続かない。暑い夏、練習後の野球部員が、花壇にペットボトルで水をあげているところを見たことがある。確かに、どんこう会の世話だけではもたないだろう。彼だけではないのではないのか。直接目にしなくても、植物を愛する人なら気づくだろう。世話をしてくれている…。挨拶だけでない、君たちのそういう行為が、OBの稀有な活動の持続を支えているのではないだろうか。

輪が広がってゆく。土曜日の午後、テニスコート裏の林で、民間委託の主事さんが草むしりをしてくれていたことがある。勤務時間外である。最初はどんこう会の人かと思った。私が「ありがとうございます」と声をかけたら、近くにいた学友も「ありがとうございます」と言った。

おやじの会も同様。小・中の例は聞くが、高等学校では珍しい。『豊多摩高校おやじの会十周年誌』によれば、都立高校3番目の例である。毎夏、どんこう会と合同で草刈りの校内美化活動をしている。学友会も参加する。記念祭では、焼きそばや合格煎餅の食物販売もしている。そして、先日のキャリア講演会（1年生）。交通費も出ないという不十分な条件で、11人の「おやじ」が、仕事を休んで参加して下さった。

P T Aとしては、体育祭やロードレースで、スポーツドリンクの補給もしていただいた。

ほかの都立高校では、聞いたことのない話ばかりである。

参加する動機は様々だろう。卒業生には、母校への郷愁^{きょうしゅう}もあったかもしれない。保護者には、学校への関心が大きいかもしれない。が、初心だけでは続かない。後輩が失礼だったり、子どもが拒絶したりしていたら、幻滅や齟齬^{そご}につながる。来校時の君たちの言行も、また来ようというモチベーションになっているはずなのである。学友が大人に感謝し、礼節に大人が応える。連鎖が循環し、余波が広がる。豊多摩の稀有な現象は、両者が共鳴し、連鎖し続けた結果だと思われる。はずれているだろうか。

その姿勢が、かけがえのない美質である。

続けるべきことは、明らかである。勉強も部活も精一杯やって、礼儀正しくすることである。

付け加えるとすれば、体育祭の種目や記念祭のクラス企画を考えるとき、少しでも、保護者や卒業生の視点を考えることである。大人に媚びるのではない。自己満足ではなく、他者の視点から考えることによって、自己を対象化すれば、そこに客観性や普遍性が生まれ、君たちを次のステージに進ませてくれる。

たとえば、記念祭のクラス企画。現状は、展示より映像、映像より演劇が評価される段階…。内容は、みんなで楽しむレベル。大賞の行方を振り返れば、その「みんな」に少しでも大人の視点が入っているものが評価されている。健全である。あとは、しみりさせるか、考えさせることができれば、次の段階に進める。階段をのぼろうとすることが大切である。賢い人は、すでに準備している…。

新聞の投書欄から

投書欄【声】 京極教授 真の知性だった

大学職員 岩本 渉（東京都 61）

42年前、大学2年のときに京極純一教授の政治過程論の講義を受けた。東京・駒場の大教室で行われた講義は、政治問題や政治制度をなぞったような内容ではなく、民俗学者の柳田国男の「日本の祭」などに言及しつつ、日本人の特質から政治を見ようとするもので、人気が高かった。

ある日、前の講義が長引き、黒板一面にチョークで多くの字が書き残されていた。用務員さんが一生懸命に消していたのだが、思うようにはかどらない。その苦闘ぶりを見て、学生の何人かが笑った。

ようやく黒板をきれいにし、一礼して教室を出ていく用務員さんに教授は会釈を返し、講義を始めた。開口一番「君たちはどうして笑ったのですか。あの方たちのおかげで、私たちは大学で研究や勉強ができるのではないですか」と、いつになく厳しい口調で言われた。日頃は研究の内容のみ話されていた先生の言葉に驚いた。

いま考えれば、教授にとっては普通の人間が尊敬されながら生きていく社会が理想だったのではないか。

真の知性を、われわれはまた失った。

「朝日新聞」2016年2月18日（木）朝刊

* 京極純一は、元東京大学教授で、2016年（平成28年）2月1日に亡くなった政治学者。